とある魔道師と幻想殺し

Taciturn fraud

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある魔道師と幻想殺し

【Ｎコード】
Ｎ３３４４Ｘ

【作者名】
Ｔａｃｉｔｕｒｎ　ｆｒａｕｄ

【あらすじ】
何も、こんな悲劇的な結末じゃなくても良いはずだ。そいつを食い止めるために、戦ったっていいはずだ。上条当麻の活躍で第三次世界大戦が終わり、平和な日常が始まっていた…しかしそこに上条当麻はいない
なぜなら、上条当麻は未来に行っていたから？上条当麻が目を覚ました場所はミッドチルダという魔術ではなく魔法が使われているところだった！？機動六課の訓練所に落ちた上条は事件に関わることになって…

幻想殺しと魔道師が交差する時、物語は始まる

プロローグ（前書き）

一応この作品が僕の処女作です。面白くないかもしれませんが読んでくれるとうれしいです！また、間違いやおかしな点があれば言ってくれると幸いです

プロローグ

何も、こんな悲劇的な結末じゃなくても良いはずだ。
そいつを食い止めるために、戦ったっていいはずだ。

この時、二つの影が最短距離で激突した。
右手に《幻想殺し》を持つ男、上条当麻と暴走した大天使、ミーシャ＝クロイツェフは
激突した。
《幻想殺し》を使いミーシャ＝クロイツェフを消したその瞬間！
彼、上条当麻の体を光り輝いた何かが包み込んだ。
……一方その頃、とある訓練所では…
「次の一撃で終わりにしましょう！！」
「いいよ、全力全開で返り討ちにしてあげる！」
青色の髪をした少女が呼びかけると、橙色の髪のツインテールの女性が答える
「「ディバイ～ン」」
この時、彼女達はまだ気づいていない。
上空で意識がないツンツン頭の男が落ちてきていることに…
「「バスター！！」」
桃色の光線と水色の光線が衝突しそうな時に、
間に入るように、ツンツン頭の男が落ちてくる…
「「えっ！？」」
「ぐはっ」
光線は見事に男に直撃した。もちろん意識はないので、そのまま男は、海に落ちた。
こんな時、彼ならこういうだろう「不幸だぁぁ！」…と
この時、それを見ていたメンバーがあわてて彼を助けに行ったのは別の話である…

上条当麻と魔道師が交差する時、物語は始まる…

出会い

上条は、体中にする痛みで目が覚めた
上条「…・・ここは？」
？「あっ、起きたのね！」
声のする方を見ると、髪が金色の女性がこっちを見ていた
上条「ここは何処ですか？」
？「ここはミッドチルダよ」
ミッドチルダ？聞いたことがない名前だ…
そんなことを考えていると、急にドアが開き
「シャマル、彼の目が覚めたって本当！？」と言いながら橙色の髪をした女性が入ってきた
あの髪が金色の女性は、シャマルっていうのか…
橙色の髪をした人がこっちにに来る
「体は大丈夫？」
上条「あぁ…大丈夫ですよ…慣れてますから……それよりえーっと…」
「あっ自己紹介がまだだったね、私、高町なのは！君は？」
上条「おれは、上条当麻っす、それより聞きたいことがあるんですけど…」
なのは「なに？」（上条当麻？どっかで聞いたような…）
俺が聞きたいことは一つしかない
上条「第三次世界大戦は？」
なのは「なに言ってるの？４年前に終わったじゃない？」
えっ４年前？
上条「それじゃあ学園都市は？」
なのは「君、大丈夫？それも４年前に壊滅したじゃない…」
何がなんなのか全くわからない…学園都市が壊滅？
高町が心配そうな目でこちらを見ている

上条（警戒されてしまうか？）
上条「な、な～んてな！冗談だよ！」
なのは「ならいいけど・・・」
上条「わざわざありがとうございました。それじゃあ「まって！」
ガシッ？」
上条「どうしたんでせうか？」
なのは「こっちの質問にも答えて…なんで空から落ちてきたの？」
上条「はい？上条さんがですか？」
なのは「うん、落ちて来たよ？」
上条「そんな訳ないでしょう、では上条さんはこれにて…痛ッ」ぐらっ
なのは「えっ！？」ぼふっ
？「彼が目を覚ましたって本ｔ！？…なのはが押し倒されて！…」
上条さんの不幸は健在です
？「なるほど…なのはが押し倒された訳ではないと言うことだね…」
なのは「何度もそう言ってるでしょフェイトちゃん！」
なのフェイ「「…で君は何処に行こうとしてるのかな？」」
上条「ギクゥ！？なっ何のことでしょうか？」
フェイト「さっきから一歩ずつドアに近づいて行ってるでしょう」
なのは「見てないと思ったら大間違いだよ！…傷だって治ってないのに」
上条「だってここに居たら迷惑がかかりそうなんで…そういう事で…！？」
なのは「バインドさせてもらったよ」
上条「これは魔術でせうか？」
フェイト「正確には魔法だけどね…」
ニヤァ上条「それを聞いて安心しました」バキンッ
なのは「バインドが」
フェイト「砕けた？」
上条「それでは、サヨナラぁ」ダッ

なのフェイ「……えっ！？」
なのは「ハッ追うよフェイトちゃん！」
フェイト「うっうん」
なのは「レイジングハート」
フェイト「バルディッシュ」
なのフェイ「「セ～トアァップ」」
シャマル「なにごとよ全く…」

その時、訓練所では……
「そう落ちこむなよスバル」
スバル「だってヴィータ副隊長！当てたんですよ私あのツンツン頭の人を全力で…」
ヴィータ「生きてるんだから良いだろ…なのはの全力もくらってな…」
上条「助けて～」
ヴィータ「…ピンピンしてるぞアイツ」
スバル「…ですね…って追っかけているの隊長達じゃないですか！」
なのは「ヴィータちゃん、スバルとティアナ」
フェイト「エリオとキャロ、シグナム」
「「「「はっはい！」」」」
なのフェイ「そいつを捕まえて！」
なのは「多少の攻撃はしても良いから」
一同「はい！」
上条「あぁ～不幸だぁぁ～」

避けるのは得意なんです

ヴィータ「行くぞアイゼン！死ねぇぇ！」ブンッ
上条「危なねぇっ！」
ヴィータ「チッ外したか…行けぇスバル、ティアナ！」
「「はいっ！！」」
ティアナ「シュートバレット！！」バンッ
ティアナ「今よスバル」
スバル「うん！！」
上条「挟み撃ちかよ！？よけにゃ死ぬわ！」
スバル「今だエリオ」
エリオ「わかってます！」
上条「今度は突っ込んできた！？ヤベェ」タッ
エリオ「飛び越えたなんて…」
キャロ「フリード！」ボッ
上条「これは避けれるぜ」
シグナム「紫電一閃！」
上条「それガチ技じゃねぇか！」
シグナム（もらった！）キュイーン
一同「「「「「！？」」」」」」
エリオ「技を消した！？」
上条「やったぜ！」
この時、彼は気づかなかった。
足元に空き缶があることを…
上条「えぇ～不幸だぁ」ドテン
なのは「覚悟は」
フェイト「できてるよね」
上条「ヒィィィ」
シグナム「ちょっと待て、提案が一つあるんだが…」

フェイト「なに？」
シグナム「一対一の模擬戦をしたらどうだろうか」
なのは「…そうだね、そうしようか」
上条「ハァ～不幸だ…じゃあ俺が勝ったら勝手にさせてくれよ？」
フェイト「良いよ、負けないから」
なのは「ただしこっちが勝ったらおとなしく医療室に戻ってね」
上条「わかってるよ」
フェイト「先に私がいくね、なのは」
なのは「頼んだよフェイトちゃん！」

上条当麻ＶＳフェイト（前書き）

戦闘シーンは得意じゃありませんっ！…という訳であまり期待しないでください

上条当麻ＶＳフェイト

模擬戦場
フェイト「最初から本気でいくよ」
上条「いいぜ、かかってこい」
フェイト「インパルスフォーム」
一同（あっあの人死んだ）
上条「お互いに１ヒット受けたら負けな」
フェイト「わかった」（速攻で終わらせて早く医務室に連れてってあげなきゃ）
なのは「模擬戦開始！」
フェイト「行くよ！！」フュン
上条「速い！」
フェイト（後ろがとれた！）「私の勝ちだぁ！」
上条「それは気が早いんじゃねーの？」ひょい
一同（あの状況で避けた！？）
フェイト「…なんであの状況で避けれるのに攻撃してこないの？」
上条「だってあんた手加減してるだろ？」
フェイト「…なんでわかったの？」
上条「だってその武器を縦にしてきただろ」
上条「本気でするならその武器で俺をブッ飛ばせたはずだったからな」
フェイト「！？……」（この人、あの一瞬でそこまで…）
上条「来るなら本気で来ないと、お前負けるぞ？」
フェイト「そう、みたいだね…」
上条（まぁかなりビビったんですけどね～）
フェイト「いくよ！」ダッ
ヴィータ「あいつかなり強いな」
シグナム「あぁ一度は手合せしたいものだな」

ティアナ「ど、どんだけ強いのよ」
スバル「最初の速度でも私達かわせないのにね…」
ティアナ「あの人、何をしている人なんだろうね」
スバル「後で聞いてみようよ」
ティアナ「そうね…フェイト隊長が勝てばの話だけど…」
もう少しで勝敗が決まる……

上条「やっぱり早いですね」
フェイト「全部の攻撃をかわしてる人がよく言うね」
上条「これじゃあ決着なんてつく訳ねえよ…」
フェイト「次の一撃でラストにするよ」
上条「わかった、次の一撃で終わりにしよう！」
フェイト「勝つのは私だ！！」ヒュン
フェイトが一瞬で上条の後ろまで行く
フェイト「もらった！」
上条「悪いがあんたよりも早い奴と戦った事があるんでね！！」
上条は完璧に読んでいた。
一同（あの人（アイツ）のかちだ！！）
そう、この勝負は上条がかつはずだった。…そのまま拳を出していれば
上条（あれ、この服装ってたぶん魔力でできてるよな？
　それを右手で触ったらアニェーゼのように…！？）
そんな事を思ってしまったが最後、上条は出していた拳を止めた。
その後、左手を出そうとしたが間に合うはずがない
上条の体がきれいに飛んで行った
フェイト「勝ったの？」
シグナム「いや、試合に勝って勝負に負けたという所だろう」
フェイト「やっぱり…っていうか怪我人相手に本気で攻撃しちゃったよ」タッ

シグナム「あれで怪我をしているのか…」
ヴィータ「味方にしておきてぇな」
シグナム「まったくだな」
エリオ「すごい…」
キャロ「うん、あの状態のフェイトさんに勝ちそうになるなんて…」
一同「「「「あの人と戦ってみたいな…」」」」

質問攻め

上条「ここは確か医務室だったような…」
シャマル「あっ目が覚めたのね！皆に連絡するからちょっと待ってね～」
シャマルさんが皆に連絡しに行ったようだ
上条「負けたのか…まっ、仕方がないか」
？「お前は強いらしいな」
上条「うわっ犬がしゃべった！？」
？「犬ではなくオオカミだ、それにザフィーラという名があるぞ上条当麻」
上条「そうか、それは悪かったなザフィーラ」
ザフィーラ「やけに物わかりがいいな」
上条「なんかもう慣れた」
ザフィーラ「そうか…」
ザフィーラとの会話が終わるとドアが開き9人程入ってくる
上条「どうしたんだ大勢でこんなところに…もう上条さんは逃げませんよ～」
ティアナ「あの、上条当麻さん」
上条「ん？」
スバル「私たちに稽古をつけてくれませんか？」
上条「ハァなんで俺なんかに？」
エリオ「フェイトさんとの模擬戦を見て思ったんです」
キャロ「この人強いなって」
上条「なんでオレ負けたじゃん」
フェイト「勝てるはずの所で攻撃を止めたからね」
上条「ギックゥ～！な、何のことか全くわかりませんなぁ」ダラダラはやて「シグナムから聞いたでぇ～あんたわざと負けたんやってなぁ」

上条「誰がわざと負けるか！？」
ヴィータ「ならなんでアッコで殴りきらなかったんだよ？」
上条「あれは、フェイトさんの事をおもってだなぁ…ハッ」
シグナム「何故テスタロッサを思って殴らないんだ？」
上条「えっと～そ、そう顔面を殴っちゃいけないかなぁって」
なのは「嘘は良いから正直に答えなさい！！」
上条「だぁ～明日だ、明日全部説明するから」
はやて「ホントやろうね…シャマル」
シャマル「わかってますよ、一歩も出しませんよ♪」
上条「」
なのは「じゃあ明日訓練所で全部説明してもらおうよ」
フェイト「そうしよう、今日はもう疲れたし」
上条「不幸だ…じゃあ交換条件で学園都市の事を情報として下さい」
なのは「わかったよ、第三次世界大戦についても調べておくよ」
上条「ありがとう、高町さん」
なのは「な・の・はって呼んで」
上条「じゃあ、ありがとうなのは」キリッ
なのは「ど、どういたしまして」／／／／
その夜
なのは「上条君の為に頑張ろう」／／／／
上条「疲れたな…寝よう」

翌日、訓練所
はやて「さぁて説明してもらおうか」
上条「その前に…なのは！」
なのは「ふぇ、な、なに？」
上条「資料を見せてくれないか？」
フェイト「いいんじゃない？なのは…まだ皆来てないし…」
なのは「そうだね、ハイこれ」
上条「ありがとう、逃げないから安心しろ」

上条は資料に目を通して絶望した
スバル「すみません、待たせちゃって」
上条「ハハッアハハハハッ」
なのは「か、上条君？」
上条「ありがとう、なのは凄くわかりやすかったよ」
はやて「…説明してもらおうか…」

幻想殺しの話、そして…（前書き）

更新が遅くなってしまってスミマセン！
…ネタが浮かばなかったので、オリキャラを出してみました！

幻想殺しの話、そして…

上条「そうだな、まず昨日殴らなかった理由からいくか」
上条「俺の右手には《幻想殺し》という力がついている」
一同「《幻想殺し》？」
上条「そう、この右手で触れれば異能の力なら全て消せるんだ」
フェイト「じゃあ、あの時上条さんが私を殴っていれば魔力でできている…」
上条「あの服は消える」
「つまり負けた上に素っ裸ってことだ」
ヴィータ「でも信じられねぇよ《幻想殺し》なんて」
上条「そういうだろうと思ったよ、だからなのは！」
なのは「なに？」
上条「俺に向けて一発魔法を出してくれ」
なのは「うん、いいよ」ポッ
上条「よく見ておけよ…」キュイーン
一同「本当に消した！？」
フェイト「上条君ありがとう」
上条「いや、大したことないさ…これが殴らなかった理由だ」
一同「なるほど」
はやて「…まだあるやろ、説明すること」
上条「ああ、それは俺が落ちてきた原因と俺のこれまで…かな」
一同「原因？」
上条「あくまで仮説だがな…」
ティアナ「原因ってなんですか？」
上条「実は俺さ今この時代にいちゃダメなんだよ」
一同「？？？」
上条「まずは第三次世界大戦について詳しく説明しようかな」

「第三次世界大戦はどういう風に聞いた？」
フェイト「確か学園都市とロシア側の宗教の対立にイギリスが割って入ったって感じだよ」
上条「表向きはそうなっているのか…」
エリオ「表向き？」
シグナム「裏があるみたいな言い方だな」
上条「みたい、じゃなくて裏があるんだ」
「あれは一人の男が世界を救いたくて起こした事なんだよ」
ヴィータ「どうして世界を救いたくて戦争を起こすんだよ！」
上条「ああ間違っている、だからそんな幻想は殺してやったのさ」
キャロ「じゃあ戦争を止めたのは上条さんなんですか？！」
上条「そんなスゴイ事はしてないしな」
「そもそも俺の右手が原因だったしな…」
なのは「どういう事？」
上条「どうやら俺の右手が力を手に入れるために必要だったらしい…」
？「それは良いことを聞かせてもらったな」
一同「「「「？！」」」」」
声のする方を見ると、ひとりの男性が空を飛んでいた…
ヴィータ「何者だテメエェ！」
？「私はゴルダーだ、覚えておけ…生きていればな」ニヤッ
フェイト「来るよ！」
フェイトがそういうと皆がバリアジャケットをまとう
ゴルダー「私が彼の右手だけだよ、だから？動くな〃」
ゴルダーがそういうと全員、一歩も動けなくなる
上条「これは…《黄金錬成》？！」
ゴルダー「ほぉ～わかる奴がいるとは驚きだな」
上条「なんでお前がこの術を…」
ゴルダー「錬金術について学んでいたらこうなったのさ」
上条は右手に全ての力を加え自分の体に触れる

すると高い音が鳴り、動けるようになる
ゴルダー「まだまだ勝負はこれからだよ…」

激突（前書き）

最近投稿のペースが遅れてる気がするので、気を付けていきたいと思います

激突

動けない人全員を触れるわけもなく、自然と一対一になる
上条「…お前の目的は何なんだ！？」
ゴルダー「俺はこの力を使い世界を我が物にする」
上条は思う
こいつはアイツと同じ間違いをしていやがる！
はやて「そんな事できるわけないやろ！アンタなんかに」
ゴルダー「？なんか〝だとぉ！」
ゴルダー「…決めたお前から殺す…」
上条はこの光景にデジャブを覚える、それを気づいた瞬間走り出す
ゴルダー「…？死ね〟」
そう言われた瞬間、体が揺らぎ前に向かって電池が切れたように倒れた
「「「「「「はやて（ちゃん）！！」」」」」」
上条「はやてぇぇぇぇぇぇ！！」
上条は全速力ではやての元に行き右手で抱きかかえる
すると微かに息をしている音がするので安心する
それと同時に怒りも覚えている
上条「アンタが何の躊躇もなく人を殺しても良いと思っているならまずは、そのふざけた幻想をぶち殺す！！」

それがなのは達が最初に見た上条当麻の本気の殺気だった
ゴルダー「？感電死〟」
ゴルダーがそういうと雷が上条の方へ向かっていく
上条は右手を前に出しその雷を消す
ゴルダー「なるほど魔術では消されてしまうか…」
上条（もうバレた！？）

ゴルダー「それなら…」
ゴルダー「？左手に銃、右手に剣″そして最後に？動くな″」
上条「しまっ―」
上条はさっきの全力疾走で先程までの力は出ない
そしてゴルダーは一歩ずつ確実にこちらに近づいてくる
スバル「上条さん逃げて！」
ゴルダー「右手は頂いていく！」サッ
音はない、ゴルダーが右手を振った瞬間、上条の右腕が肩口から切断された

激突（後書き）

能力を『黄金錬金』にしたのは、一番はじめに思い浮かんだからです。

…展開が速いので気をつけていきたいと思います！

竜王の顎

切られた感覚はなかった
キャロ「キャァー！」
キャロの叫び声が自分の意識を保たせる
ゴルダー「これで終わりだ」
ゴルダーが左手の撃とうとした瞬間…
上条のこめかみからブチリ、とスイッチの切り替わる音が聞こえた
上条「あはははははははははははははははははははははははは
はははははは―ッ！！」
上条が左手で銃を落とす、そして相手の腹に目掛けて渾身のけりを入れる
ゴルダーは後方3メートルのあたりまで吹き飛んだ
ゴルダーはそのことを『不快』に思った
ゴルダー（なぜだ、何故この状況で笑っていられる？）
『不快』は次第に『不安』に代わっていく
上条はゆっくりとゴルダーの方へ向かってくる
不安は大きくなっていく
上条「どうした？殺してみろよ」
「はやてにしたようにしてみろよ…」
ゴルダー「…右手に暗器銃、弾は一発で十分！」
ゴルダーは自分の右手が震えていることすらわからない
ゴルダー「く、来るなぁ―」バシュ
目に見えない速さの弾が上条のスレスレをとおっていく
ゴルダー（なぜだ！！何故当たらない？）
そして弾が当たらないことにより
しだいに『不安』は、大きな『恐怖』へと変わっていく。
ゴルダー（あいつはいったいなんなんだ？）
今まで考えもしなかった相手の正体を考え出す

上条「おい」
突然声を出されてゴルダーは体をビクリ、と震わす
上条「まさか、この程度で俺の《幻想殺し》を潰せるとか思ったんじゃねえだろうなア？」
右肩から先は切られてしまってないはずなのに、
もう気絶しても、おかしくないほどの血液が流れているのに…

上条は心底楽しそうに笑う

ゴルダー「なんなんだ！それはっ！？」
それ、ゴルダーの目線の先あるものは……
上条の右腕の断面から二メートルを超すほどの巨大に強大な、竜王の顎
それでも竜王の顎で頭から飲み込もうとすると……

動きが止まった

ゴルダーはすでに恐怖から気を失っていた
上条が自分の左手で竜王の顎を押さえていた
上条「お前は……出てくるな！！」
上条が左手で竜王の顎を潰すと切られたはずの右腕があった…
「後は頼んだ…」そう言うと上条は
電池の切れた人形のようにその場に倒れた
皆は呆然としていた
訳のわからないことが多すぎる…
フェイト「：ハッなのは！医務室に運ばなきゃ」
なのは「そ、そうだね！　皆運ぶのを手伝って～」
一同は、モヤモヤとした想いを胸に秘めながら
はやてと上条を二人を医務室へ運んだ

フォアード陣隊長会議（前書き）

遅くなってスミマセン！
よくわからない描写が入ってますが、後々必要になりますので頭の片隅に入れておいてください

フォアード陣隊長会議

上条を医務室に運んだ後、フォアード隊長陣は集まって今日の事について話し合っていた
フェイト「…それにしても、最後の？アレ〟は何なんだろう？」
？アレ〟すなわちゴルダーが上条の右腕を切断した時に出てきた禍々しい顎
その正体は上条自身にもわかっていない
なのは「あの顎はわからないけど、あの時の上条君は凄く怖かったよね…」
なのはの一言に頷く一同
ヴィータ「まぁ後でアイツに聞けば良いだろ…」
フェイト「…それよりも気になることがあるんだ」
シグナム「ゴルガーとやらが使った『黄金錬成』、か」
フェイト「はい…」
なのは「確かに私達の使うものとは違った雰囲気がしたね」
ヴィータ「ああ、言ったことが本当に起きるなんて今でも信じられねぇぜ」
なのは「ホントに動けなくなっちゃったもんね」
シグナム「…それに、あと少しで主はやてが死んでしまう所だった」
「「「「……」」」」
？死ね〟その一言で本当に人が死んでしまう所だった
しかも自分たちにとって大切な人が
ヴィータ「…あいつには感謝しねぇとな」
他の3人も口には出さないが思っている事は同じである
なのは「やっぱり上条君は良い人だねっ！」ニコッ
ヴィータ「だなっ！」ニッ
あぁ、どうしてこの二人はこうも単純なんだろう…と思わざるを得なかったフェイトとシグナムだった

真っ黒な暗闇の中、一人の青年上条当麻は歩いていた
前後左右、上も下もわからない空間の中をひたすら歩いていた
そんな気味の悪い空間の最深部、上条はたった一枚の扉を見つけた
扉の周りには決して綺麗とは言えない光が帯びていた
恐る恐る扉の方へ向かっていく
周りが見えない上条は後ろの地面が無くなり奈落の底に変化している事に気づいていない
上条が扉にそっと触れる
キュイーン
反応するはずのない右手が何故か反応した
ゴゴゴゴゴゴッ
突如開かれた扉により、上条は奈落の底へと落ちて行った

フォアード陣隊長会議（後書き）

スミマセン、これから期末テストがあるのでテスト勉強の為少し更新が遅れます

案内（前書き）

やっと終わった、魔の期末テスト！…という訳でこれから通常通り頑張っていきます！！

案内

上条が目を覚ますと、もう見慣れた天井があった
上条「医務室か……というか布団がやけに重いような…ブッ？！」
あたりを見回すとゴルダーとの戦いを見ていた全員がベッドを囲んで寝ていた
ティアナ「ん…目が覚めちゃいましたか」
上条「あぁ起こしたかワリィ」
ティアナ「いえ、大丈夫です。上条さんの方こそ大丈夫ですか？」
上条「あぁ大したことないぞ！…っていうか上条さんはやめてくれないか？」
ティアナ「じゃあどう呼べば…」
上条「呼び捨てか、当麻で良いよ」
ティアナ「えぇ！悪いですよソレは」
上条「ん～じゃあ“上条”って呼び捨てでいいよ」
「後、敬語は禁止ね」
ティアナ「…わかりまs…わかったわ。上条」／／／
はやて「どうしたんや、騒がしいでぇ」
騒いでいたせいか次に、はやてが起きたようだ
上条「おはよう、はやて」キリッ
はやて「お、おはよう」／／／
上条「ほら皆おきろぉ」ゆさゆさ
なのは「ふぇ、あっおはよう」
上条「ああ、おはよう」
なのは「…て、もうすぐ訓練の時間じゃない！！皆いくよ！！」
一同「「「「「「は、はい」」」」」」
なのは達は、凄く慌てた様子で訓練所に向かっていった
上条「ふぅ皆行ったか…」
はやて「まだ、おるよ！」

上条「うおっビックリした！！どうしたんだ一人だけ残って」
はやて「言いたいことがあってな」
上条「言いたいこと？」
はやて「うん、あのな　私を助けてくれてありがとう！」
上条「上条さんは人として当たり前のことをしただけですよ～」
はやて「でも、ありがとな…なんかお礼させてくれへん？」
上条「上条さんは、お礼目的でした訳じゃないんですよ～」
はやて「うちがしたいんや…何がいい？今日一日あいとるでぇ～」
上条「じゃあココを案内してもらおうかな」
はやて「そんなんでエエんか？」
上条「ああ頼むよ…」
別にお礼などしてもらはなくても良いのだが、それでははやてが満足しないので
しぶしぶ頼むことにした
はやて「じゃあ行こうか？」
上条「オウ！ついていきますよ姫」
はやて「それじゃあ、探検へレッツゴーや！！」

はやて「ここが食堂やで」
上条「へぇ～ずいぶん広いんだな！」
？「はやてちゃ～ん」
声のした方を向くと、小さい人形のような人がフワフワと飛んできていた
上条「なんかちっこいのが飛んできたでせうよ？」
？「ちっこいとは失礼するです！私はリイン・フォース？です！
上条当麻さん」
上条「？なんで俺の名前を…？」
リイン「それは昨日はやてちゃんがずっと―」
はやて「わぁ～！？言ったらあかんよ！」
上条「はやてがどうかしたのか？」

はやて「な、なんもあらへんよ！！」
上条「そうか…困ったことがあったら相談しろよ？力になるから」
はやて「了解やっ！！」
リイン「それじゃあ私は仕事があるんで…さらばです」
上条「じゃあな」

はやて「ここは知っての通り、訓練所や」
上条「ゲッ俺の血が床についてる…」
床にはゴルガーとの戦いで散ってしまった血がこびりついていた
なのは「はやてちゃんに上条君！どうしたの？」
なのはが上条たちに気付いたのか、小走りで近づいてきた
上条「俺が頼んでココを案内してもらってるんだ」
なのは「そうなんだ…」（私に言えば案内してあげたのに…）
なのはが悶々としている事を知らないで、上条は他のメンバーと騒いでいる
上条「…それより訓練はしなくても良いのか？」
そういえば！、と思いそれぞれが、なのはの方を見る
なのは「…それじゃあ訓練を始めようか……」
上条（あれ？何かなのはキレてないか？）
自分自身のせいだとは思っていない上条は、己の不幸センサーがビンビンな事に恐怖していた

いつも通りの不幸（前書き）

書き方を変えてみたら？という感想が来ていたので、思い切って変えてみました！思ったよりも難しいですね…
どちらが良かったか、感想よろしくお願いします！！

いつも通りの不幸

「それじゃあ訓練を始めようか…」と、額に青筋を立てているなのはが言った
ちなみに、今彼女は女性がしてはならないだろうと思われる顔をしている
「「「「「「……」」」」」」
フォワード陣は恐怖で返事さえもできないようだ
「…あれ、返事は？」
その一言でフォワード陣がビクゥ、とする
「「「「は、ハイっ」」」」
今日は皆、大変そうだなぁ～とか呑気なことを思っている上条だが彼の不幸センサーが不発に終わるなど
「……では今日はヴィータ副隊長とシグナム副隊長のコンビ対いつものメンバー＋上条君でしてもらいます。１ヒットでもしたらその人は負けね」

あるはずなかったのだ！

「…えっ！何でおれが？しかもオレ怪我人なんですけど！？」
意味が分からないと言った様子で、なのはに言い返す
「何か文句でも…？」なのはが上条に向かってギラッ、と視線を向ける
「イエ、ナンデモゴザイマセン！」
上条の意見が通る筈もなく、撃沈した
「で、でも俺、右手で触れないんだけど…」
それって不利だろ？と少し困ったふうに言う
そこで、はやてが一言ニヤついたふうに言う
「ええやん触れば？脱がせ、脱がせ！！」

「それはダメだろ！」
「軍手ならあるよ～」
……結局なのはが見つけた軍手で解決してしまった
「なぁ上条君？その軍手貸してくれへん？」と、はやてが言ってきたので訓練が始まるまで貸すことにした

模擬戦開始！（前書き）

この書き方でこれからも頑張っていきたいと思います
感想もよろしくお願いします！！

模擬戦開始！

作戦会議を始めた中で上条はスバルとティアナに作戦の内容を話した
「ヨシッ作戦は――――――――で行くぞ！」
「「えっ、えぇ～！？」」
「やってみようぜ！」
上条の作戦を聞き
「面白そうだね、その作戦！！」と若干興奮気味のスバル
そんなスバルの様子を見て
「とりあえずやってみましょうか…」と呆れた風に言うティアナ

「そろそろ始めてもいいかなぁ～？」
なのはが、こちらの様子をうかがうように聞いてきた
「あぁ良いぜ！」
「それじゃあ開始！」
開始の合図を聞き、上条がゆっくりとシグナムの方へ行く
「前線に出てきてやったぜ」
「それはありがたいな…」
バトルマニアのシグナムからすればフェイトに勝ちそうになった相手をするのが嬉しいのだろう
よく見ると顔が笑っている
「手加減なしでいいぜ」
「最初からそのつもりだ！」
上条の発言により二人の戦いが始まった
「あぶねぇ！」
怪我のせいで、ギリギリで躱すことしかできないが確実に防御をしている上条
そして、その様子を見てシグナムは上条が怪我人だということを忘れ攻撃している

だが、その様子を見て不敵な笑みを浮かべる人物がこう言った

「脱がせ！脱がせ！」

……これから降りかかる不幸を上条はまだ知らない

謎の作戦

上条とシグナムが戦っている時スバルとヴィータもお互い向かい合っていた
「…で私には二人か…」
「当麻さんの作戦ですから！」
自信があるのか、胸を張って言うスバル
「ずいぶん甘く見られたな私も…」
「小っちゃいからじゃないですか？」
バカにするような口調でヴィータを挑発するスバル

プツンッ
その時、何かが切れた音がした
「…スバル、お前は言ってはならないことを口にしたな」
「ヤバッつい口が滑って」
この期に及んで挑発を続けるスバル
「ワタシ、オマエユルサナイ！」
「何故にカタコト～？」
スバルの挑発による模擬戦という名の追いかけっこが始まった

その様子を遠くから眺めているライトニング部隊は…
「キレましたねヴィータ副隊長…」
「背の事は禁句だからね……」
だから絶対に行っちゃダメだよ、と困ったような顔で言うフェイト
「？それよりティアナさんの様子がおかしくないですか？」
ティアナの行動に疑問を持ったキャロがその場にいるみんなに聞く
「私もそれがきになっとったんや…」
「まさかスバルを巻き込んでヴィータちゃんに魔力砲を撃つつもりじゃあ…！？」

「でも当麻の作戦なんだよね？」
「どういうつもり何やろうな？」
この時だけ隊長陣が全員、首を傾げるというレアな姿が見れた

模擬戦決着！！（前書き）

今回はいつもより少し長めに書いてみました

模擬戦決着！！

そろそろ模擬戦も終了しようとしていた

「今だ、隙あり！」

上条はシグナムに向けて拳を繰り出す

「甘い！」

上条の拳をシグナムはレヴァンティンで受け止める

この勝負もらった！！、とシグナムは思った

このとき上条の体は、がら空きで防御なんてロクにできない状況だ。

しかし…

その時上条は不敵に笑った

「かかった！今だティアナ！！」

そう言われシグナムは先程、ティアナがいた場所を見る

「……」

ティアナはちゃんと最初にいた場所にいる

バシュン！！

その瞬間シグナムの背中に魔力弾が当たる

「！？」

「な、どういう事だ！？」

スバルの相手をしていたヴィータが驚いた様子でシグナムの方を見る

だがヴィータの体を水色のバインドでスバルが拘束する

「もらったぁ！」

すでに上条はヴィータの方へ向かっていた

「ヤバ――――」

…なぜ気が付かなかったのだろう

上条はこの時気が付かなかった…自分の軍手に穴が開いていて中指

が出ていることに……
自分の軍手が腕を早く動かすだけで穴が開くほど薄く削られていることに
「勝った〈バキンッ〉ゼ…？――――ッ！？」
上条の視界に入ったのは下着姿のヴィータの姿だった
「ｆｓ０．ｓｈ！？きゃ、キャア――――――――――！！！」
「えっなんで？…って軍手に穴が開いてる！？」
「「「「「か～み～じょう～～！！！」」」」」
上条が振り返ると模擬戦を見ていたはずの皆が真後ろまで来ていた
……軽くホラーである
「え～っと、私が悪いんでせうか？」
「「「「「もちろんっ！！」」」」」
「すいませんでした！土下座するから許してください！？」
もはや上条の辞書にプライドという言葉はない
「「「「「Ｉ☆ＹＡ☆ＤＡ！！」」」」」
「だぁぁぁＨＵ☆ＫＯ☆Ｕ☆ＤＡ！！」
上条当麻は走る、自分の命を悪魔から守るために…
「「「「「待ちなさい！！」」」」」

その様子を見て不敵に笑う一人の女性
「……私が削っておいたで！」
「は～や～て～」
「ヴィ、ヴィータ！こ、これはやな、その――」
「はやての仕業か～！？」
「逃げるが勝ち～♪」
「待ちやがれ！」
「待てと言われて待つバカはおらんよ～」

「…で何故か軍手が削られていたから、自分のせいではないと？」
捕まった上条は皆に囲まれるようにして正座をしていた

「そこまでは言ってないけど…罪が軽くなれば良いな、とか思ったり…」
「にゃはは〜〜……なりません！」
「ですよねぇぇ！ふこうだぁぁぁぁぁ」
「それじゃあ覚悟は良い？」
フェイトが上条に聞いてきた
「良くないと言ったら？」
「「「「「「「「「「コロス」」」」」」」」」」
「やっぱり？」
「「「「「「「「「「うん♪」」」」」」」」」」
「それじゃあエクセリオォォンバァスタァァー！」
「プラズマ…ランサァー！」
「紫電一閃！」
「シュートバレット！」
「シューティング・レイ！」
「ディバイィィン…バァスタァー！」
「ちょっ、それは死ぬ！？」
「死ねば？」
「それは酷ガブレハドブゥス！！」
それぞれの必殺技が上条に決まる
流石、必ず殺す技である
「…やりすぎたかな？…上条君？生きてる〜？」
「」
返事がない…ただの屍のようだ……
「た、大変だ！！調子に乗ってやりすぎた！？」
フェイトが慌てたようになのは達に告げる
ちょうど今、シャマルは外出中だから医務室は使えないし…
「？どうしたの、フェイトちゃん？」
「上条君をどうしようかと思って……」
「う〜ん…私たちの部屋で良いんじゃないかな？」

「そうだね、時間も結構ないし…ちょっと寝かせてくるよ」
「わかった～右手には気を付けてね！」
「わかってる」
そういうとフェイトは部屋の方へ向かっていった
フェイトが見えなくなると、なのはは先程の模擬戦の事を思い出していた
（まさかヴィータちゃんにスバルだけで戦わせるなんてね…）
皆が？上条がシグナムと戦うから、必然的に二人はヴィータと戦う〃と誰もが思っていた
だが、そんな幻想（常識）を彼は殺した
戦いなれている彼を見て、彼女は思う
（上条君、君はいったい何者なの？）
今、彼女の問いに答える者はいない…

それと別談だが、その一部始終を見ていた少年はその日は女性を見る度に震えたらしい

自称「メカニックデザイナー」現る！（前書き）

前回よりも更に長めです

自称「メカニックデザイナー」現る！

「ここは？」
上条が目を覚ますと、見覚えのない天井が広がっていた
（誰かの部屋かな？）
「まぁ訓練所に行ってみるか…」
さっきまでいた場所に戻った方がいいだろうと思い訓練所の方へ行こうとしたが……
「……盛大に迷ったぞ、この野郎！？」
当たり前だ、まだ案内してもらってないのだから
「あの～どうかしたんですか？」
「ちょっと迷ってしまいまして…、あなたは？」
「訓練所の方へ行く途中ですけど…」
「ちょうどよかった！俺も行こうと思ってたら迷ってしまって…」
「では一緒の行きましょうか」
「ありがとうございます！！…ところであなたは？」
「あっ自己紹介が遅れましたね！
私は機動六課ロングアーチ、シャリオ・フィニーノ一等陸士です！
あなたは？」
「俺は上条当麻！よろしくなフィニーノ！！」
「あなたが噂の空から落ちてきた系の方ですね！？あとシャリオで良いですよ」
「なんだよソレ…あと俺に敬語は良いからなシャリオ」
「わかったわ…上条さん」
「それじゃあ行くかシャリオ」
「そうだね！」

「あっシャリオさんと上条君が来たよ　！」
「上条君もう大丈夫なの？」

攻撃してしまって一番後悔しているであろうフェイトが聞いてきた
「ああ、こんな事しょっちゅうある上条さんは慣れたんですよ～」
「しょっちゅう人の服を脱がしよんか！？」
「ちげーよ！！理不尽な暴力にだよっ！？」
「それも、どうかともうけどね…」
「ところでシャリオと当麻は一緒に来たん？」
「なんかよくわからない部屋に居たからさ訓練所に戻ろうとしたら迷ったんだよ」
「私も訓練所に行こうとしたら大きな声が聞こえたから向かってみたら」
「シャリオと出会ったんだよ」
「シャリオは何しに来たの？」
訓練が一息ついたようで、なのはが聞いてきた
「ハッ忘れるところでした！」
いやいや忘れたらいけねぇだろ、と思ったが口に出さないのが紳士・上条である
「実は上条さんのデバイスを作るためにここに来たんです！」
「「「「「「えっ」」」」」」
「？」
上条はデバイスをよく知らないので首をかしげている
「な、なあ」
「なに？」
「？デバイス〟って何だ？」
「「「「「「えぇぇ！？」」」」」」
上条は皆の驚きの声にビビる
他の皆は上条がデバイスについて知らないことについて驚く
「どうしたんでせうか？」
「本当にデバイスを知らないの？」
「わからないから聞いてるんでせうよ？」
「ティアナ当麻に説明してあげて…」

「デバイス、ミッドチルダ式ではインテリジェントデバイス
　主の性質によって自らの調整を行い、
さらに人工知能を持っているので会話・質疑応答ができます」
「まぁ、そんな感じかな…」
ティアナが知識を披露できたことに胸を張っているが皆は反応しない
「それは何の動力で動いているんだ？」
「魔力で動いているよ」
また魔力か…、と顎に手を当てて考えて
「そっか…じゃあ俺はいらねぇや」
「「「「「えっ！？」」」」」
「どうして？」
「だって魔力で動いていて人工知能があるんだろ？
それを何かの間違いで核を触ってしまったら
俺はそのデバイスを殺してしまうことになるからな…
いくら人工知能でもソレをしてしまいたくないんだ……」
フェイトの質問に少し真剣な顔で答える上条
「で、でも復元できますよ！？」
「それでもだ…いうなら殺して生き返らしたって感じだから気が進まないんだ……」
「：なら仕方ないね」
「そうだね」
なのはとフェイトが賛同する
「悪いな、俺のためなのに」
「大丈夫や、何ともあらへんよ」
「それじゃあデータだけ取らせてください」
「データ？」
「はい、《幻想殺し》についてのデータが欲しいんです！」
「まぁ良いけど…痛いのはカンベンな」
「大丈夫、どの程度の魔法が消えるか試すだけだから」
「それって強力なのもするってことだろ！不幸だ…」

「ガンバレ当麻」
「すぐに終わるんで、ここでココでしましょう！」
「良いけど…誰の魔法を受ければいいんだ？」
「それはモチロンなのはさんにですよ！！」
「……死ぬよね？」
「非殺傷設定だから大丈夫ですよ…たぶん」
「たぶん！？今たぶんって言ったよコイツ！」
「あぁ～もう！それでは始めてください！」
「できるだけ手を抜くから頑張って！」
「なのはさん…今日シャマルさんいませんよね？」
皆が離れた後でシャリオがなのはに近づいてきた
「？そうだけど…それが？」
「つまりココで気絶させたら、上条さんの様子を見るという口実で
一緒に寝れますよ！」
実はこの女、なのはが上条に惚れていることを見抜いていた
「！？」

「できるだけ弱いので頼むな～」
「ゴメン上条君、本気で行くね…」
「何故に！？」
「全力全快ッスターライト・・・」
訓練をした後の訓練所…つまり魔力は充満している
（終わったな俺…最後に一つだけ『不幸だぁぁぁあああああ！！！』
）
「ブレイカー！！」
「どんだけバカデカイんだよぉぉぉ」

上条当麻はこの日三度目の『死』をむかえる…

「……ってなるかと思ったわ！」
上条は時間は掛かったものの見事にスターライトブレイカーを消した
「うそっ！あれすら消しちゃうなんて」
「いくらリミットをかけていたからって流石に自信をなくすよ…」
「リミット？」
「隊長、副隊長はリミットがかけてあるんです」
「あれで本気じゃないのかよ…」
「それでも破られた事なかったのに…って上条君右手どうしたの！？」
よく見ると上条の右手から血がポタポタと垂れていた
「ああ、デカすぎるのは右手の消す速度が間に合わないんだよ」
「上条君ごめんね？」
「気にするなよ、こんぐらい大したことないから」
「大したことなくはないよ…」
呆れた風にフェイトが言う
「死にはしないだろ…」
「なんで基準が死ぬか、死なないか、なんですか？」
特別救助隊を志望しているスバルからすれば今の発言は聞きづてならないらしい
「ん～そういう場面が多かったからな…」
「今度その場面とやらを聞かせてもらうからね…」

「フェイト、そんな事聞いても何も面白くないぞ？」
「それでもだよ」
「気が向いたらな」
「ところでその怪我どうするん？」
「包帯か何かするさ」
「それならうちの部屋にあるで～」
「マジか！ありがとな、はやて」
「どういたしましてや、じゃあ行こうか」
「ああ」

キャロとなんとか話せるようになったエリオは…
「そういえば結局僕たちはシグナム副隊長には勝てなかったね」
「ごめんね、私のサポートが下手だから…」
「練習して頑張ろう！」
「うん！！」
と、このようにしてチームワークを深めていた
「…そういえば上条君と寝れなかったなぁ～」
「上条君と寝るつもりだったの？」
「うん、シャリオが上条君を気絶させたら一緒に寝れるって」
「シャリオ？どういう事なのかな？？」ゴゴゴ
「いや～どのぐらい消せるのか気になったので…」
「ハァ…後で当麻に謝っといてね」
一応微笑んではいるが先に行っておこう
凄く……恐いです
「りょ、了解しましたぁぁ」
「今日は、はやての方で寝そうだね」
お話したかったのにな、とフェイトは空を眺めながら、そうつぶやいた

一方その頃
「へぇ～結構きれいなんだな」
「上条君の部屋じゃないんだから当たり前やろ」
「なっ上条さんの部屋は全然汚れてませんの事よ！？」
「どうせベッドの下にでもエッチな本があるんやろ？」
「ベッドの下なんてバレるから置いてません！！」
「バレるって誰にばれるん？」（持っとることは否定せんのやね）
「……」
「どうしたん？」
急に黙ってしまった上条の様子を窺うように、はやてが覗き込む
「居候の事を思い出して…ちょっと…な」
「心配なんか？」
「いや、今のアイツには頼れる奴がたくさんいるから大丈夫だろ…」
「…じゃあ何で泣いとるん？」
上条は自分の頬を触ると濡れていた
「泣いてなんかねぇよ」
「そんな顔で言われても説得力無いで」
「……悪いなはやて…つい思い出してしまってな」
「気にせんでええよ、ここにはうちしかおらんから」
「……ありがとな」
「別にええよ、そういえば上条君は何処で寝るん？」
「食堂とか、かな？」
「それはアカン！…ここで寝たらどうや？」
「はいぃ？それは色々まずいんじゃないんでしょうか？」
「なにがまずいん？上条君まさか襲う気じゃあ！」
「誰が襲うか！！だ・れ・が！」
「そこまで言わんでも…」
「上条さんは紳士なんですぅ」
（かかった！）
はやては勝利を確信した

「紳士なら大丈夫やね」
「ハッ、しまったぁぁああ！！」
「一緒に寝ような、上条君♪」
「クッソ――――――――ッ」
見事にハメられた上条だった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3344x/

とある魔道師と幻想殺し

2011年12月19日19時52分発行